

庭の花材あれこれ

花岡喜重

はじめに

ひとりのガーデニングブームは、一休みといったところと思われ、少々気後れするところですが、若干の宅地を活用し、庭造りをしました。造り始めてほぼ二十数年、あれこれ得られるところもあり、独断ながら述べることにしました。庭の構成は、各コーナーの環境や景観に配慮しながらも特徴のあるものとし、いずれも周年観賞を前提に花材の組み合わせ、植栽の方法を試みました。

この庭の造成地は北関東平野部で、気象条件は冬の最低気温 -5°C 前後で晴れの日が多く北風が強い、夏の気温は極めて高い地域です。造成にあたって一般的でない条件もあるので、それらをあげておきます。植え込み地の植栽は、据え置きを主としますが、その間に花木・宿根草の一部を鉢植えか不透根シートの根巻で移植し、季節の景観作りに利用しました。したがって移植地を設けて株を移動し、また寒さに弱い種類の冬越しには、ビニールハウス（最低温度 $2\sim 3^{\circ}\text{C}$ ）を使用しました。



庭の主要な部分 西側から H25. 9. 8

窓辺の緑陰コーナーにボーダー花壇

玄関先の直接視界遮蔽や窓辺の緑陰コーナーに、ボーダー花壇を設けました。この場所は公道に面し、西日が強く冬の北風が強い場所で、排水条件は良いです。

夏冬の切り替え時期は概ね5月と10月で、この時期に草花を主に植え替えしました。一部に這性のコニ

ファー・マサキ・アイビー・ハツユキカズラを植栽し、冬季の花材を補いました。夏花壇には宿根草であるミソハギ・クサキョウチクトウ・ルリマツリ・ヒメヒマワリ・ヤナギバヒマワリなど、一部に一歳サルズベリを、秋にはアロニア（赤実）を使用しました。花材は鉢植えとシートの根巻による移植で、常に花のある花壇を試みました。

この中で高温期でも褪色がなく生育も順調で、刈り込みや摘心による草丈の調節ができ、花期も長い種類にミソハギ・クサキョウチクトウ・ルリマツリがあげられます。また花壇の背景の植え込み地に大型のアジサイ（カシワバアジサイ・アナベル）を初夏に、盛夏に一歳サルズベリ、夏秋にシマススキ・アロニア（赤実）で野趣を演出してみました。



夏 H26. 7. 9



冬 H27. 1. 4

冬花壇は据え置き植栽を活かしつつ、低温寒風に耐える種類の選定を課題としました。オタフクナンテン・コニファー（主に黄色系）など一般的な種類の他に、キンボウジュ・ジャノメエリカ・ギョリュウバイ、草物としてピオラ混色・アリッサム・シロタエギクを使用しました。キンボウジュ・ジャノメエリカ・ギョリュウバイは、いずれも低温害は見られず、庭園樹として使用できることが確認できました。特にジャノメエリカは11月から翌春4月まで開花し、厳寒期に若干の被害がある程度で、冬の主要な材料となります。ギョリュウバイも秋冬咲きは少なくないですが、春咲きの花材として重要と思われました。

建物の隅地

この場所は冬季の寒風が避けられ、夏は玄関と主庭の境に遮蔽を兼ねたツバキが植栽されているため、強い日射が避けられる小花壇です。



夏 H27. 8. 16



冬 H26. 11. 28

夏の花材は日陰に適する種類で、ベゴニア・インパチエンス・コリウス・オリヅルランなどと、宿根草のヒューケラを使いました。それぞれに損失があり、インパチエンスは徒長的な生育で梅雨明けから病害が出

やすく、ヒューケラは高温期にやや弱いですが、植え付けの仕方改善がみられます。なお、壁際にアナナスの流木付けを置き、アクセントにしました。

冬季は寒風が避けられるので、ヒューケラを据え置いて、ガーデンシクラメンを主材としてプリムラ（ジュリアン・マラコイデス）を植えています。このように寒風を避けられる場所でもシクラメンは12月下旬からは寒害を受け、翌春には被害の大きい状態となりました。ジュリアンが寒害を受けながらも観賞できる状態で冬越しできます。品種改良の進んだマラコイデスは耐寒性に乏しいですが、在来品種はやや強く、高木内の陰地などでよく育ち、早春によく咲きます。

建物の遮蔽を兼ねた植栽地前のボーダー花壇

南に隣家があるため、遮蔽を兼ねて高木を植栽しました。樹種はツバキ・サザンカ・ナツツバキ・サンシュユなどです。環境条件は夏は半日陰、冬は3月まで日陰の状態です。



夏 H25. 6. 11



冬 H26. 3. 8

夏の花壇はギボウシを主役に、その間にベゴニアを植え、周辺の植栽間にはバラのスタンダードと初夏にアジサイ類、夏秋はサルスベリなどを配置しています。

このバラのスタンダードは、7月に緑枝の接ぎ木挿しをしたもので、台木50～70cmを用い、密閉挿しをすることにより短期間で養生でき、花壇に立体感を出すことができました。

冬季はほぼ日照がないので、ハボタンを主にオタフクナンテンを混植しています。このような日陰地ではハボタンの白系が際立ち、葉色の新鮮さを保ちました。植栽の中では花の少ない厳寒期にアカバナマンサクが花木として有効でした。

ベランダの花材

ベランダは周年の観賞を前提とし、種類や利用方法についてあれこれ試みました。環境条件は母屋の南で周年日が当たる場所です。



夏 H25. 7. 20



冬 H26. 12. 5

夏はブーゲンビリア・ランタナ・ゲンペイカズラなどを使用しましたが、ブーゲンビリアは高温の時期に有効でした。4～6月が季咲きで、以降は短日処理により秋まで使用し、さらに秋咲きのものは冬の窓辺に使用しました。また、夏の屋外で使用する観葉の種類として、シマトネリコ・ドドナエア・メラレウカ・カボック・ベンジャミン・アラレアなどは仕立ての方法

を改善することにより、有効活用できると思われました。

冬の花材としては11月から翌春4月まで開花するジャノメエリカが適材でした。ギョリュウバイも花期は4～5月となりますが主要花材です。

玄関飾花

季節や行事（正月の門松・桃の節句・端午の節句）の事例です。



夏 H24. 6. 22



冬 H26. 12. 24

初夏はアジサイ類を主に使用しています。アジサイは種類により多様な枝・葉・花の変化があり、装飾素材として多様な景観が構成できるものだと思います。それぞれ種類の特徴を活かす面白さがあります。盛夏には熱帯花木を主とし、ベンジャミン・ガジュマルなど観葉植物を使用しましたが、アオキの使用も有効でした。

冬の玄関先は寒風多日照ですが、ジャノメエリカは厳寒期に少々寒害を受けつつも十分観賞できます。この場所の花材としてウメ・オタフクナンテン・ハボタン・シロタエギク、2月中旬からはサンシュユ・ユキヤナギ・レンギョウなどの促成花木を使用しています。

正月の門松について、背後に門松を中心にしたコンテナを置いてみました。門松は多様な種類をみますが、ここに一例をあげました。このように玄関先には象徴的な装飾もよいかと思われます。

おわりに

取り上げたコーナーの課題が多岐にわたり、いささかまとめのつかない記述になりました。造園と園芸の挟間を感じながら、それは少々課題が大きすぎますが、健康のためと思いながら作っています。参考にしていただけたところがありましたら幸甚です。